夕刊フジ　2018年12月8日（7日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㊸ コラムニスト 勝谷誠彦

「死ぬなんて馬鹿だ」

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

私は、痛みや苦しみの少ない最期、「平穏死」を謳（うた）い続けている町医者ですが、それと人の生き方はまったく別の話です。時に過激すぎたり、時に狂気であったりと、どうやっても平穏には生きられない人に、憧れや抗（あらが）えない魅力を感じてしまうのも事実です。

同じ兵庫・尼崎に生きたコラムニストの勝谷誠彦さんもそんな一人です。11月28日に尼崎市内の病院で死去。享年57。死因は、重症アルコール性肝炎からの肝不全でした。勝谷さんとは10年以上の付き合いでした。開業医をされていたお父様は昔、尼崎市内科医会の会長で、私がその何代か後に同職に就任した際、一番喜び、いつも激励をしてくれた恩人です。そうした御縁で誠彦氏と出会いました。

無頼派（もはや死語ですが）という言葉が似合う文筆家でした。見かけの強引さとは裏腹にとても繊細で几帳面な人。その頃から勝谷さんの酒量が気になっていましたが、それが仇となってしまいました。

アルコールを処理する臓器は右上腹部にある肝臓です。長年にわたってお酒を大量に飲み続けるとアルコール性慢性肝炎や脂肪肝を経て、やがて肝硬変に至ります。これらを治す手立ては禁酒しかありません。

それでもお酒を飲み続けると「劇症型肝炎」や「肝不全」となり、黄疸（おうだん）や腹水や肝性脳症や消化管出血などの合併症を呈します。そうなると急変して亡くなることも珍しくはありません。肝不全とは肝臓がほぼ働いていない状態です。するとアンモニアという毒素が肝臓で解毒できないため脳の働きが低下し、手をバタバタ振ったり、興奮したり、最終的には意識レベルが低下してしまいます。

勝谷さんがこの病気で入院したのは8月のこと。しかし奇跡的に回復し、10月には一旦退院しましたが、完全にお酒を断つことができず、隠れて飲んでいたようです。本当に悲しいことですが、彼の弱さだと責める気持ちにはなれません。彼に断酒ができるくらいなら、とうに筆を折っていたかもしれないなと思うからです。

死の翌日、通夜の直前に葬儀場で対面させてもらいました。初めて見る穏やかな顔をして、2年前に父上を弔ったのと同じ場所で、誠彦さんは眠っていました。思えばあの頃から、彼の酒量は増えていたのでしょう。父上への愛着はとても強く、彼は父の死を振り返り以前こう書いていました。

「葬式の残念なところは、自分のそれを見て〝いや、大したものだな〟と思えないことだとあまりにくだらないがしみじみと感じた」

勝谷さん。お父上もそうでしたが、あなたの葬儀も大したものです。あんなに世間に悪態をついていたのに、こんなに大勢の人が「死ぬなんて馬鹿だ」と泣いています。ホントに馬鹿ですよ。大好きでした。